

特集

市制100周年のいま、 川崎市役所の存在価値を考える

レポート



市制100周年記念事業

【みんなの川崎祭・Colors, Future! Summit 2023】

2024(令和6)年に川崎市は市制100周年を迎える。川崎市では市制100周年記念事業をオール川崎市で推進していくとともに、記念事業の象徴的な事業として開催する全国都市緑化かわさきフェアと一体的な展開を図っていくため、2022(令和4)年に合同の実行委員会を設立した。さらに2023(令和5)年から企業、大学7団体から構成する共創プラットフォーム「Colors, Future! Summit 2023製作委員会」を立ち上げ、「FESTIVAL」(お祭り)と「CONFERENCE」(会議)を軸に、川崎の多様な“好き”を集め、掛け合わせていくことで「あたらしい川崎」を生み出していくというコンセプトのもと、さまざまな取り組みを展開している。

ここでは、100周年記念のイベントとして2023(令和5)年11月に実施した『みんなの川崎祭』、『Colors, Future! Summit 2023』をレポートする。

みんなの川崎祭



市役所通りが憩いの賑わい空間に

「みんなの川崎祭」は、川崎を好きになってもらうことを目的に、2023(令和5)年11月5日に川崎市役所周辺の3会場(市役所通り、稲毛公園、カワサキ文化会館)で、川崎で活躍する人たちや市民による音楽・スポーツ・アートなど川崎の魅力を集結し開催した。各地にフードブースが設けられるとともに、市役所通りを半分封鎖し、居心地が良くウォーカブルなまち^{※1}を体験でき、緑を身近に感じられるスペースを提供するなど、かつてないほど大規模な仕掛け



市役所通り約300mを封鎖



市役所前でダブルダッチ



特設リングでプロレスも

が施されたイベントとなった。

目玉となったのは「市役所通り」と呼ばれる旧東海道から国道15号までの市役所新本庁舎側の道路空間（約300m）をイベント空間として活用したことである。早朝5時から一部道路を封鎖し、中央分離帯への安全柵の設置等を実施したうえで、9時から19時まで片側3車線の規制を行った。この時間帯は自動車、バイク、自転車が規制を受けるとともに、路線バスの迂回運行が行われた。その結果、10月に竣工を迎えた新しい市役所本庁舎周辺に、広大な歩行空間が出現し、車道上の花に彩られたロングテーブルや休憩スペース、ステージなどにより、非日常的な賑わい空間が創出された。

子どもたちによる踊りやチアを中心とした「コミュニティステージ」、ダブルダッチやプレイキン、アトラティブパフォーマンスなどによる「センターステージ」、ジャズライブを行う「パークステージ」という3つのステージが設けられ、道行く人の盛り上がりと一体感が醸成されていた。

このほか、本庁舎前では参加型アートイベントも開催された。川崎発のプロレス団体「ヒートアップ」らによるプロレスリングや、環境に配慮した不用品の生まれ変わりをテーマにした「アップサイクルゾーン」、川崎内外の多彩な飲食店を集めた「フードゾーン」など空間は活況を呈した。

同日には、カワサキ文化会館で「Perfect Days」と題したストリートスポーツの体験イベントが開催された。バスケットボールの川崎ブレイブサンダースやプレイキンの世界大会で優勝経験を持つフローリアーズが参加し、フリースロー、プレイキン、スケボー、ダブルダッチなどの体験会に多くの人が集まった。

JR川崎駅北口通路では、実行委員会に参画しているスポーツチームの協力により、ユニフォームが展示され、北口空間を華やかに演出した。

当日は約40,000人を動員し、実行委員会によれば「今日で川崎を好きになったという学生の声も聞こえた」とのことだった。100周年の幕開けに相応しい賑わいに満ちた本イベントの開催にあたっては、市役所では各部局が様々な角度から関わることとなった。

「みんなの川崎祭」実行委員会の中心メンバーとして、イベント全体のコーディネートを担ったのは総務企画局シティプロモーション推進室（100周年記念担当）であった。100周年記念担当では、実行委員会参画団体の共創の場を創出し、イベントで実施するアイデアを実現すべく各種調整を担うとともに、チラシやWEB広告を用いた広報の実施調整、職員の動員関係の調整、100周年イベントとしての統一感を醸成するための調整を行った。

道路空間の活用を担ったのはまちづくり局である。市役所通りや稲毛公園などの公共空間を活かしたイベント実施の中心的役割を担い、全市での賑わい創出に向けた施設・展示調整等を行った。建設緑政局では、交通規制のための警察協議・交通事業者との調整をはじめ、本庁舎前の緑化空間を創出するための展示・ワークショップの内容検討や実施協力者の調整などを行った。経済労働局は、警察協議や地元商店街・店舗との調整を行った。このほか、市民文化局はジャズライブなどのステージ出演者の調整、ストリートスポーツを中心とした若者文化関係の出演者の調整を行った。環境局ではイベントで出たごみを適切に分別し、プラごみの再生を行うため、エコステーションを設置した。さらに、川崎区役所では東海道宿起立400年記念関係のステージや飲食

※1 ウォーカブルなまち：道路を車のための移動空間としてではなく、人間のための居心地良く歩ける公共空間として活用する考え方。国土交通省が2018（平成30）年に概念を打ち出し、翌2019（令和元）年に初めて予算化した。

ブースの調整を行うとともに、道路管理者として道路公園センターによる道路利用調整や衛生課による飲食店の衛生管理を担当した。火器を使用するブースには消防局が火気使用の管理を行うなど、多様な部局が連携・役割分担しながら一つのイベントを作り上げた。

関係局への取材から、今回のイベントから学べることは大きく2点あると考えた。1つは、「まずやってみて成功体験を得ること」の意味である。もう1つは、「連携」は言うほど簡単ではないことである。

1点目の「まずやってみて成功体験を得ること」について解説したい。今回のイベントの目玉は何といっても交通量の多い市役所通りでイベントを実施したことである。朝から夜まで10時間も市役所通りの片側3車線を通行止めにするのは初めてのことで、自動車、自転車、タクシーに加え、市バスや臨港バスのルートとなっている道路を止め、すべてに迂回を求めるのは「従来の発想ではまず無理」(建設緑政局)だったという。さらに、ホテルの利用客が沿道から入れなくなることから、周辺の商店、企業の理解も必要な中、「川崎で」「夜まで」「アルコールを出して」市役所通りでイベントを行う、というのは多くの苦労があったことは想像に難くない。道路を活用するには、交通管理者として安全管理を行う神奈川県警察に使用許可を取り、道路管理者として道路の適切な公的利用を管理する川崎区役所道路公園センターの占有許可を取る必要がある。国土交通省からは日本

全国でウォークアブルなまちづくりが推進できるよう協力を求める通知文が都道府県警察に送付されているが、まだまだ現場への浸透が十分でない地域が多く、警察との協議では「なぜ道路でやるのか。公園ではダメなのか」と言われ続け、「道路を止める理由を理解してもらうまで多くの時間と労力を要した」(建設緑政局)という。また、2024(令和6)年に市制100周年を迎えるプレ事業・実証実験という位置づけであることから、「他の道路に渋滞が発生するなどの失敗は許されなかった」(建設緑政局)と大きなプレッシャーがかかっていたことを明かした。当日の誘導担当者は通常の倍、職員も当初の倍を超える100名以上を動員する警備計画を作成し、交通量調査や大量の資料とともに粘り強い協議を続けた結果、通行止めができることが確認できたのは10月初旬だった。イベントまで残り1か月となる中、まちづくり局が中心となり空間活用のコンテンツや演者の調整、委託事業者や協賛企業との調整を急ピッチで進め、実現までこぎつけた。結果的に、「来場者アンケートも好評で、目標を達成し、事故・苦情もほぼなかったのは良かった」(100周年記念担当)という声や、「何より市役所通りで通行止めイベントができることが分かったのは良かった」(まちづくり局)、「横浜の山下公園などでも行われている中、川崎でもウォークアブルなまちづくりのキックオフができた」(建設緑政局)との感触が庁内でつかめたことはこの先に向けた大きな成功体験と言える。

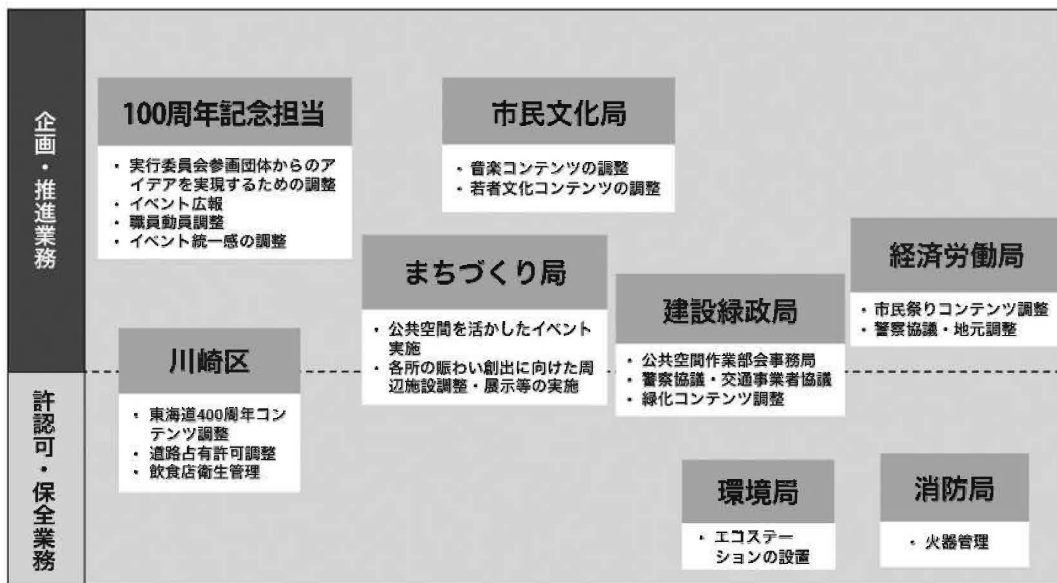


図1 みんなの川崎祭 市役所内関係図



図2 みんなの川崎祭 エリア別関係図

2点目は、「連携」は言うほど簡単ではないことである。今回のイベントはかつてないほどの部局にまたがり、どの業務をどの局が担当するのかが予め決まっていないうちに進んだという。とりまとめ・調整と一言でいえるほど業務が具体化していない中では、「アンケートの内容はどうするのか、問い合わせの代表番号をどうするのか、といった細々とした、それでいて重要なことが“隙間”として落ちやすかった」（100周年記念担当）という。公共空間の活用を主導したまちづくり局の担当者は「年度当初にはイベントの具体的な内容が全く決まっていなかった。待っていてもイベント内容をみんなが率先して考えるという状況にないのであれば、自分たちがまず走り出し、他の部局が磁石のようについてくればよいと思った」と言い、意識的に推進役を担ったという。100周年記念担当でも、進めながら気づいた「細々とした、それでいて重要なこと」を積極的に拾い、実現に結びつけた。イベントに限らず事業においても連携、協働といった言葉で複数の組織や関係者が一つの目的を果たすために動くことは珍しくなくなった。この時、「予算や許可を出す」「中身を考える」といった役割が明確に分かれている関係ではなく、同じ立ち位置から一つのゴールに向けて、互いにリソースを出し合いながらできること・やりたいことを実行していく「共創」の関係になることが重要である。「名前

と一緒に書かれているといった形式的なことではなく、マインドやビジョンが共有されていることが何より大事」（まちづくり局）ということであろう。

市役所には法令どおりに事務を行う、毎年度定型的な内容で事務を行う「ルーティン業務」と言われる仕事だけでなく、新たな事業やイベントなど、裁量と振れ幅の大きい仕事が少なからず存在する。そのような事業・イベントを成功裏に終えるためには、「善意とやる気だけでは済まない」（100周年記念担当）現実がある。一つのイベントを実施するだけでもto do listに落とし込めば、そのアクションは数十から百以上となる。そうした中で特定のアクションに労力や時間を注ぎすぎるとプロジェクトマネジメントは破綻する。自分の仕事を円滑に行うために他の仕事を引き受けない、という姿勢や態度はしばしば批判的に語られることが多いが、複数の部署が関わる場合に、どこまで自らが行き、どこまでを別の部局が行うか、といった業務範囲の設定は、プレイヤーと内容を勘案した絶妙なバランスと判断力、そして部局間の対話と共通認識が不可欠である。善意とやる気を土台として、時間と労力の注ぎどころ、力点の置き所を判断し、かつ自らの部局の強みを発揮しながら共創事業・イベントに関与する。このような仕事への関わり方がイベント成功の条件であることを今回のイベントで気づくことができた。